ヴィンチェンツォ・ベッリーニ

19 世紀前半のイタリアオペラを代表する作曲家の一人です。彼の作品は「ベルカント・オペラ」として知られ、美しい旋律と声楽の技巧が特徴です。以下は彼の代表的なオペラです：

1. **ノルマ** (Norma) - 1831 年初演。ソプラノのアリア「清らかな女神」(Casta Diva)が特に有名です[1]。
2. **夢遊病の女** (La sonnambula) - 1831 年初演。夢遊病の女性を描いた作品で、リリカルな旋律が特徴です[1]。
3. **清教徒** (I puritani) - 1835 年初演。ベッリーニの最後のオペラで、彼の最高傑作の一つとされています[1]。

ベッリーニのオペラは、ロッシーニやドニゼッティと並び、ベルカント・オペラの黄金時代を築きました。彼の音楽は、ショパンやワーグナーなど多くの作曲家にも影響を与えました[1]。

ノルマ(Norma)

《ノルマ(Norma)》**は、イタリアの作曲家ヴィンチェンツォ・ベッリーニによって作曲された全 2 幕からなるオペラです。1831 年にミラノのスカラ座で初演され、ベッリーニの最も有名で評価の高い作品の一つとして広く知られています。このオペラは、ベッリーニの典型的な「ベルカント」スタイルの傑作であり、特に主役ノルマのアリア「清らかな女神」(Casta Diva)が名高いです。

概要

- **作曲者**: ヴィンチェンツォ・ベッリーニ
- **台本**: フェリーチェ・ロマーニ(Felice Romani)
- **初演**: 1831 年 12 月 26 日、ミラノのスカラ座
- **ジャンル**: ベルカント・オペラ
- **舞台設定**: 紀元前 1 世紀、ガリア(現在のフランス)のドルイドの森

あらすじ

《ノルマ》の物語は、古代ローマによる支配に対するガリアの抵抗を背景に、愛と裏切り、信仰の葛藤を描いています。主人公ノルマは、ガリアのドルイド教の巫女でありながら、ローマ人将校ポッリオーネとの秘密の愛を育んでいます。物語はノルマの内なる葛藤と、個人的な愛と祖国への義務との間で揺れる彼女の心情を中心に展開します。

第一幕

1. **ガリアの森**
   物語はガリアの聖なる森で始まります。ローマに対する反乱の機運が高まっており、ドルイド教の長老オロヴェーゾとその信徒たちは、巫女であるノルマの指示を待っています。ポッリオーネは、かつてノルマを愛していたが、今では彼女の若い友人アダルジーザに心を移してしまっています。彼はアダルジーザと一緒にローマへ逃れたいと願っています。
2. **ノルマの登場と「清らかな女神」**
   ノルマが登場し、彼女はガリア人にローマに対する反乱を抑えるよう呼びかけ、月の女神に平和を祈る美しいアリア「清らかな女神」を歌います。このアリアは、オペラ全体の中でも最も有名で、ベルカントの代表的なアリアとされています。
3. **アダルジーザの告白**
   アダルジーザはノルマに、自分が恋に落ちたことを告白します。ノルマは最初、彼女の気持ちを理解しようとしますが、アダルジーザが愛している相手がポッリオーネであることを知り、激しく動揺します。ノルマはポッリオーネとアダルジーザの裏切りを知り、復讐を誓います。

第二幕

1. **ノルマの苦悩**
   ノルマは、ポッリオーネとの間に生まれた二人の子供を殺して復讐しようと考えますが、母としての愛がそれを阻止します。彼女はアダルジーザに、自分の子供たちを連れてローマへ逃げるよう説得しようとします。しかし、アダルジーザはポッリオーネを愛するノルマのために、彼を説得して彼女の元に戻すと誓います。
2. **ノルマの決意とポッリオーネの登場**
   ノルマはついにガリアの民に反乱を呼びかけることを決意します。その時、ポッリオ

ーネがアダルジーザを連れ去ろうとして捕えられます。ノルマはポッリオーネを罰するために、生け贄を捧げると宣言します。

3. **自己犠牲と和解**
   ノルマは自分を生け贄として名乗り出ます。彼女は民衆に、自分がドルイドの誓いを破ったこと、そしてポッリオーネとの関係を告白します。ポッリオーネはノルマの勇気に心を打たれ、彼女と共に火刑台へ向かうことを決意します。ノルマはアダルジーザに子供たちの世話を託し、ポッリオーネと共に火の中に入っていきます。

音楽の特徴

- **ベルカント・スタイルの頂点**: ベッリーニの作品は、美しい旋律と流れるような歌唱で知られる「ベルカント」スタイルが特徴です。《ノルマ》の中でも、このスタイルが最も純粋に表現されており、特に「清らかな女神」はベルカントの技術と表現力を極限まで要求します。
- **心理描写の音楽**: ベッリーニは音楽を通じてキャラクターの複雑な内面世界を描写するのが得意で、《ノルマ》でもノルマの内なる葛藤や愛、絶望が音楽的に鮮明に表現されています。
- **ドラマティックなデュエット**: ノルマとアダルジーザのデュエットは、友情と裏切り、愛と許しが交錯する緊張感に満ちています。このデュエットは、オペラの中でも感動的な瞬間を作り出しています。

歴史的背景と影響

《ノルマ》は、その複雑な心理描写と高度な音楽性から、初演当初はあまり評価されませんでしたが、次第にその美しさと深さが認識されるようになり、現在ではベッリーニの代表作として高く評価されています。このオペラは、ベルカント・レパートリーの中でも最も演奏される作品の一つであり、多くの偉大なソプラノ歌手がノルマ役を演じてきました。

まとめ

《ノルマ》は、愛と裏切り、信仰と義務という普遍的なテーマを扱いながらも、ベッリーニの美しい音楽がそれを高次元で表現しています。このオペラは、ベルカントの技術と感情表現の両面で最高の水準を要求するため、常に観客と歌手を魅了し続ける名作で

す。ノルマの役は特に難しく、その演技力と歌唱力を兼ね備えたソプラノによって、その真価が発揮される作品です。

夢遊病の女 (La sonnambula)

《夢遊病の女(La sonnambula)》**は、イタリアの作曲家ヴィンチェンツォ・ベッリーニが作曲し、1831 年に初演された全 2 幕のオペラです。このオペラは、ベッリーニの典型的な「ベルカント」スタイルを特徴としており、その美しい旋律と感情豊かな音楽で広く愛されています。オペラの台本はフェリーチェ・ロマーニ(Felice Romani)によって書かれました。

概要

- **作曲者**: ヴィンチェンツォ・ベッリーニ
- **台本**: フェリーチェ・ロマーニ
- **初演**: 1831 年 3 月 6 日、ミラノのカルカーノ劇場
- **ジャンル**: ベルカント・オペラ、メロドラマ・ソミンブロ
- **舞台設定**: 19 世紀初頭のスイスのアルプス地方の村

あらすじ

《夢遊病の女》の物語は、田舎の村に住む純朴な少女アミーナが夢遊病によって引き起こされる誤解と、それを通じて真実の愛が試されるエピソードを描いています。

第一幕

1. **村の祝祭と婚約**
   物語はスイスの小さな村で始まります。村人たちはアミーナとエルヴィーノの婚約を祝っており、幸せな雰囲気に包まれています。アミーナは、養母テレーザに育てられた美しい少女であり、エルヴィーノと相思相愛です。村人たちは彼女たちの幸せを祝福しています。
2. **リザの嫉妬**
   リザは宿屋の女主人であり、密かにエルヴィーノに恋をしています。エルヴィーノが

アミーナに婚約指輪を渡すのを見て、リザは嫉妬します。その時、貴族のロドルフォ伯爵が村に到着し、宿屋に宿泊することになります。リザは彼に目を向け、彼との交流を試みます。

3. **夢遊病のアミーナ**
   夜になると、アミーナが夢遊病でロドルフォの部屋に迷い込んでしまいます。ロドルフォはアミーナが夢遊病者であることに気づき、彼女を優しく見守りますが、彼が部屋を離れた後に村人たちが彼女を発見し、誤解が生じます。リザはこの機会を利用して、エルヴィーノにアミーナの不貞を訴えます。エルヴィーノはアミーナが自分を裏切ったと信じ、彼女との婚約を解消してしまいます。

第二幕

1. **アミーナの苦悩**
   アミーナはエルヴィーノの愛を失ったことに深く傷つきますが、自分の無実を証明するためにはどうすればよいか途方に暮れています。村人たちもまた、彼女の清廉な性格を知っているため、困惑しています。
2. **エルヴィーノの再会**
   エルヴィーノはまだアミーナを愛しており、彼女の悲しみに心を痛めます。彼はアミーナに謝罪しようとしますが、彼女はあまりにも傷ついており、彼の言葉を受け入れることができません。
3. **真実の証明**
   最後に、再び夢遊病状態のアミーナが現れます。彼女は無意識のまま村の中央にある橋の上に立ち、まるで夢の中を歩くかのようです。この様子を目撃した村人たちとエルヴィーノは、彼女が夢遊病者であり、ロドルフォの部屋にいたのも夢遊病のためであったことを理解します。エルヴィーノは彼女の無実を確信し、二人は再び結ばれます。物語は村全体が二人の幸せを祝福する中、ハッピーエンドで幕を閉じます。

音楽の特徴

- **ベルカントの美しさ**:《夢遊病の女》は、ベッリーニのベルカント技法が最高の形で表現されている作品の一つです。アミーナのアリア「Ah! non credea mirarti」や、

「Ah! non giunge」は、特に美しく、歌手の高度な技術と表現力を求める場面です。

- **感情表現の繊細さ**: ベッリーニはアミーナの純粋で無垢な性格を音楽的に表現するために、繊細で抒情的な旋律を用いています。アミーナのアリアは、彼女の内面の世界を豊かに描き出しています。
- **オーケストレーション**: ベッリーニのオーケストレーションは、物語の感情的な高まりや緊張感を効果的に強調し、観客を引き込む役割を果たしています。

歴史的背景と影響

《夢遊病の女》は、ベッリーニのオペラの中でも最も愛されている作品の一つであり、特に19世紀の観客に人気がありました。このオペラは、リリカルで繊細な感性を持つベルカント・オペラの伝統を代表し、ベルカントのスタイルを維持し続ける多くのソプラノ歌手によって演奏されています。

まとめ

《夢遊病の女》は、愛と誠実さ、誤解と赦しのテーマを美しい音楽とともに描き出す、ヴィンチェンツォ・ベッリーニの傑作オペラです。アミーナの役は、ベルカント技術の真価を問われる難しい役どころであり、多くの偉大なソプラノがその役を演じてきました。このオペラは、ベッリーニの美しい旋律とともに、観客に深い感動を与える作品として今日でも高く評価されています。

《清教徒(Il re pastore)》

- **初演**: 1775年
- **概要**: 若き王子が農夫として生活しながら、王国の問題を解決する物語です。牧歌的な要素が強い作品です。
- **音楽の特徴**: メロディックで軽やかな音楽が特徴です。

音楽の特徴と演出

- **キャラクター描写**: モーツァルトのオペラでは、キャラクターの感情や内面が音楽を通じて深く描かれています。アリアやデュエットは、キャラクターの心理状態を表現するための重要な手段です。
- **アリアとレチタティーヴォ**: モーツァルトは、アリアとレチタティーヴォのバランスを取り、物語の進行とキャラクターの感情を巧みに表現しています。
- **ハーモニーとオーケストレーション**: モーツァルトのオペラは、豊かなハーモニーと繊細なオーケストレーションが特徴で、音楽的な美しさと表現力を高めています。

《清教徒(I Puritani)》**は、ヴィンチェンツォ・ベッリーニ(Vincenzo Bellini)による全 3 幕からなるオペラで、1835 年に初演されました。このオペラは、ベッリーニの最後の作品であり、彼のキャリアを締めくくる壮大な傑作として知られています。タイトルにある「清教徒」とは、17 世紀のイングランドにおける厳格なプロテスタント改革派を指しています。

概要

- **作曲者**: ヴィンチェンツォ・ベッリーニ
- **台本**: カルロ・ペポリ(Carlo Pepoli)
- **初演**: 1835 年 1 月 24 日、パリのイタリア劇場
- **ジャンル**: ベルカント・オペラ
- **舞台設定**: 17 世紀、イングランドの内戦時代

あらすじ

物語は、清教徒と王党派の対立が激化する 17 世紀イングランドを舞台にしています。中心となるのは、清教徒の軍人アーサーと、彼が愛するエルヴィラの悲恋です。物語は政治的対立と愛情の葛藤が交錯する中で進行します。

第一幕

1. **婚約の日**
   清教徒派の指導者クロムウェルに仕えるリッカルドは、エルヴィラと婚約することを夢見ていました。しかし、エルヴィラの父親であるサー・ジョルジョは、娘が王党派の騎士アーサー・タルボットを愛していることを知り、二人の結婚を許します。エル

ヴィラはアーサーと結婚できることに喜びを感じますが、これにリッカルドは激しく失望します。

2. **逃避行の計画**
一方で、アーサーは王党派の元女王エンリケッタを助けるために彼女を国外へ逃亡させる計画を立てていました。エルヴィラとの結婚式の日に、アーサーはエンリケッタを助け出すために彼女と共に逃亡します。エルヴィラは、アーサーが自分を裏切ったと誤解し、絶望のあまり狂気に陥ります。

第二幕

1. **エルヴィラの狂気**
エルヴィラはアーサーに裏切られたと信じ、深い悲しみの中で狂気に陥ります。彼女の叔父サー・ジョルジョは、彼女を慰めようとしますが、彼女の心の傷は深く、リッカルドも彼女に寄り添いながら彼女を励ます。リッカルドはまだエルヴィラに愛情を抱いていますが、彼女がアーサーを愛していることを理解し、苦しみます。
2. **アーサーの帰還**
アーサーはエルヴィラの元に戻り、彼女に自分の行動の真相を伝え、彼女を救いたかっただけだと説明します。エルヴィラは彼の言葉を信じ、再び彼を愛するようになります。しかし、彼らの再会は短命であり、アーサーは再び捕えられてしまいます。

第三幕

1. **アーサーの裁判**
アーサーは反逆者として捕らえられ、死刑が宣告されます。エルヴィラは絶望し、彼を救うために嘆願します。サー・ジョルジョとリッカルドも、エルヴィラの苦しみを見かねてアーサーを助けようとします。
2. **奇跡の赦し**
最終的に、アーサーに対する恩赦が下り、彼は釈放されます。エルヴィラとアーサーは再び一緒になりますが、彼らの幸せが長続きするのかどうかは不明のままです。オペラは、この複雑な感情と政治的背景を抱えたカップルの運命に対する考えさせられる終幕で幕を閉じます。

音楽の特徴

- **ベルカント・スタイル**: 《清教徒》は、ベッリーニの特徴である「ベルカント」スタイルのオペラで、歌手に高度な技術と表現力を要求します。アリアは華麗で、特にエルヴィラの「狂気のアリア」は難易度が高く、ドラマティックな効果を生み出しています。
- **アリアとアンサンブル**: 各キャラクターの感情や状況を繊細に表現するアリアが数多く含まれており、また、複雑な感情を絡めたアンサンブルがオペラのハイライトとなっています。
- **オーケストラの役割**: オーケストラの伴奏は、キャラクターの心情や状況を支え、音楽的にも豊かで感動的な響きを提供しています。

歴史的背景と影響

《清教徒》は、ベッリーニの最後のオペラであり、その完成度の高さから、彼の作品の中でも特に評価されています。ベッリーニは、この作品でベルカントの美しさとドラマティックなストーリーテリングを融合させることに成功しました。彼の死後も、このオペラはベルカントオペラの代表作として愛され続けています。

まとめ

《清教徒》は、ヴィンチェンツォ・ベッリーニの作曲技法の集大成ともいえる作品で、政治的背景と個人の感情が交錯する壮大なドラマが展開されます。高度なベルカント技術を要求する楽曲と、深い感情を描いたストーリーが魅力で、今日でもオペラハウスで頻繁に上演される名作です。